

タッシリ・ナジェール（アルジェリア）紀行

Back to the Origins of Africa 5000years before the Pyramids
Our Travels in Tassili n'ajjer

筒井 淳

キーワード：タッシリ・ナジェール、トゥアレグ、狩猟民の時代、牛の時代



(つつい・じゅん)

歯科医師
歯学博士
ICDフェロー

成田で集まった8人、そしてパリで今回の旅行のコーディネーターとフランス語の通訳をお願いしたムッシュ・ムラタと合流してアフリカ・アルジェリアの首都アルジェを経由しサハラ旅行の中心地ジャネットへ向かう。今回訪れる地は、サハラの最深部にあるリビアと国境を接するタッシリ・ナジェールである。

今は不毛の地であるタッシリの標高1500mの台地には、私が夢見続けた7000年前の「緑のサハラ」の無数の壁画と摩訶不思議な景観がある。その台地は、総面積が日本の1.6倍もあるがアプローチするのに4つの峠しかない。私たちは、早朝ジャネットから5台の4WDに分乗し出発した。粉塵を撒き上げて疾走し、それらのひとつタファルレット峠の入り口までやって来た。

そこで、今回お世話になる現地コーディネーター・ホッジ氏、トゥアレグ族のガイド・アブドラー氏をはじめ5人、コック3人、ロバ使い4人、そしてロバ12頭と対面する。どうしてロバなの？ 畢竟これからはあまりにも急勾配の山岳道で、ここまで車で運んだ食料、食器、飲料水、テント、寝袋、燃料、プロパンのボンベなどを12頭のロバに括りつけ運ばせるのである。以前訪れたモロッコ・フェズやマラケシュのカスバのアップダウンの厳しい迷路状の細い路地で荷物の運搬に活躍していたのも、やはりロバであった。広大なタッシリの大地には、車はもちろん自転車すら無い。これからの生活は、ロバとともにある。これもまたアフリカなのだ。

タッシリはサハラ的一端というものの、一般にイメージする砂漠はここには無い。岩石と礫だけの世界。雲ひとつ無い真っ青な空に、モニュメントバレーの様に聳え立つ赤茶けた岩肌の絶壁に挑んで行く。早朝のジャネットでは、かなり冷え込みフリースやダウンを着込み焚き火の周りで暖を取っていたが、登りは次第に急勾配になりさらに強い陽に照らされ体も火照ってTシャツ一枚となる。風景も変わる。タッシリ特有の奇岩が多くなり、地球上の様相とはかけ離れた世界に近づいていく。風化侵食していく岩々の列柱に太古の息吹を体感する。果たして今までこんな景観にであっただろうか。今まで旅した南米ギアナ高地・ロライマテプイ…西アフリカ・ドゴンのバンディアガラ

平原…チベット…古生代後期の Gondwana 大陸に遡る大陸移動の証のような地層の中でもここタッシリ・ナジェールの景観の異様さは、目を見張るべきものがある。この地層が蒙った風化侵食の痕跡が物語る。

途中、フランスとイタリアの陽気で活発なパーティに出会う。お互い励ましあい、キャンディの交換をする。次第に登りの勾配は増し、断崖絶壁の岩をよじ登る。気合を抜くと崖縁から落下しそうである。足元見れば眩暈がしそう。大変である。このどこが砂漠なのだ…ロッククライミングばかり続くことに閉口しながら、ひとり眩く。

やがて視界は開け平坦な道になる。アカシアの木々が小さい林をつくる。先史期の河川の痕跡をてくてく歩く。眼下の巨大な岩塊の影に水が溜まっているのを発見する。深い緑色である。ガイドによると、この水はめったに涸れない貴重な水源であるという。こういう水溜りが、ミシェランのサハラ地図には明記されているという。その中で80年前に体長2.5mのワニが見つかったそうである。サハラにワニがいたぞって当時大騒ぎされたらしい。今はその剥製が、パリの博物館に展示されているという。サハラの壁画には、水に関係するワニ、河馬、象さらには大きい帆船まで描かれている。その名残であろう。タッシリの意味『水流の多い台地』である様にかつては河川に富んでいた地域である。我々が台地を目指して歩いている所は、大河の痕跡である。今もこの地層の最深部のどこかに水脈があるに違いない。

不思議な景観の中、我々は最後の難関の登りにチャレンジする。そして、念願の目的の岩塊の台地に立つ。風がきつく汗が吹っ飛んで気持ちいい。ここで時間遅れのランチとする。ジャネットのホテルで用意してくれたフランスパンのオープンサンドにかぶりつく。その後、また歩きはじめる。ここからは、平坦な道が多くなる。視界が広がり地平線まで見渡せ地球の球形がわかる。遥か遠くに薄っすらと山影が見える。ガイドのホッジが、「隣国リビアのアカクスだ。ここから徒歩で2日かかるのだ。」と教えてくれる。私は3年前にアカクスを訪れ、優麗な砂山からいつかはタッシリへ行きたいと眺めたものだ。そう今は、なんとタッシリからアカクスを望んでいる。夢のようだ。彼にそれ

を話すとビックリする。とうとう、ここまで幸運にしてやって来たのだ。感慨深く、一緒にアカクス背景に記念写真を撮る。彼は、クールガイで性格もいい。23歳独身のいいところ坊ちゃんらしい。フレンドリーに英語で話しかけてくる。アルジェリア国内を移動するのに、時間と安全性にルーズなアルジェリア航空の国内線でなく空軍機を使うという。セレブなのかリッチなのか権威主義なのか。でも友達になっておきたいな。

その後、本日の目的地タムリットに到着する。そこは、サハラが大河か湖かもしくは海であった頃に堆積した巨大な砂岩が激しく侵食を受け岩柱が尖塔状になった景観で有名である。印象的な尖塔は、宇宙人や古代人の基地の雰囲気すらある。いま見上げれば尖塔の上方に月があり、この景観から我々がどこかの星にいてそこから地球を眺めている様に錯覚してしまいそうだ。アストロノートになった気分だ。今日はそんな異次元景観の中にテントを設営する。

コック達が夕飯を準備してくれる間、我々は『緑のサハラの生き証人』と言われる樹齢5000年の糸杉に会いに行く。屋久島の縄文杉級のスーパースターだ。しかもこの超過酷なサハラに生き続けているその生命力に敬服する。その糸杉までの道のりは、いくつかの崖を乗り越えて行く。巨大な岩塊を超えると、大きな空間に出る。視界に大きな糸杉がはいる。岩だらけのなかに、生きている。なんと凄いことか。岩塊に糸杉の老木の組み合わせは、究極の盆栽を見ている感じである。侘びと寂。閑寂な趣。緑の葉、幹や枝、地面を這う太い地上根に、多大なエネルギーと生命観を感じる。地上根が岩の上、張りめぐる。砂漠の植物は地上部分の何十倍にも達する根を張り巡らしているとか。老木は、サハラの激動の変遷を5000年間見続けてきたのである。もし口があるなら語って頂きたい、サハラが緑に満ちていた頃の事を…

日が傾き、日没の時間が迫る。我々は大急ぎでキャンプの準備をする。サハラに入るとお天道様と水のありがたみを、ひしひし感じる。日が落ちてくると、途端に冷えてくる。Tシャツの上にトレーナーそしてダウンを着込む。頭にはヘッドライトを付ける。そのうち、ガイドのひとりが夕飯が出来たぞと呼びにくる。テントの外に出る。まわりは、もう真っ暗である。夜

の帳が下りている。ロバ使いやガイド達が、焚き火を囲みお茶を飲みながら談笑しやがてポリタンクやドラム缶を叩き歌うのが遠くから聞こえる。そんなアフリカンビートを聞きながら、我々は半洞窟になった岩の上に敷かれたイスラム文様のカーペットの上に座る。

スープをサーブされる。なんとオリーブいっぱいのおスープである。すごく美味しい。いつもは脇役のオリーブがスープの味を支えている。みずみずしい生野菜のサラダも出される。レタスもトマトも新鮮だ。サハラのは褐色の大地に緑が嬉しい。メインは、クスクスで、サフランの黄色がまさにアフリカだ。そこに、コックが野菜と肉を煮込んだシチューをかけてくれる。スパイシーで美味しい。肉は臭みがなく柔らかでジューシーである。歯ごたえもいい。料理には、みんなとても満足している。特に肉には… このときには、マトンと皆が勝手に決めつけていたが… これには後日談がある。

タッシリの旅を終え台地から降りてジャネットのスク（市場）に行った。スクは広くて食料品はもとより衣類、日用雑貨、自転車、ミュージックテープなんでもあり地元の人で賑わっている。その中で、ラクダの頭部を切り裂き大きなドラム缶の上に置かれている光景を見る。それも人どおりの一番多い通りである。よく見てみると肉屋のようである。「ラクダの肉って食べるのだ…」「そんな…」話をしていると、そばにいたムッシュがぼつりぼつり話し出す。「皆さん、ご存知なかったですか。タッシリで召し上がられていた肉は、みんなラクダですよ… ここでは、若いラクダは食料用として珍重されるのです…」「えっ…えっ…」皆驚く。「こうして…」ムッシュが置かれたラクダの頭を指差し続ける。「いいラクダが入ったら、頭を切り取りお客さんに分かるように店先に目印として置くのです…」「肉屋の看板なのだ…残酷だけどなるほど。」感心する私。でも大きな瞳と長い睫毛がやたら愛くるしい。そういえば、リビア・トリポリのスクのディーブな所一けっして観光客が立ち寄らない所に迷い込んだ時、解体され吊るされたビッグな食材用のラクダを見て驚いた。伊谷純一郎監修『アフリカを知る事典』平凡社刊では、「ラクダは家畜としてだけでなく、社会的・宗教的価値があり、まったく貴重である。サハ

ラの神の思し召しなのである。」とある。

次の日から、岩陰に古代壁画を探す。荷物はロバに運ばせ、セファールへ向かう。暑い日中は避け朝と夕に分けてそれぞれ2時間ずつ歩く。ガイドは、我々を引きつれ岩の回廊を縦横無尽に歩き回る。キャンプ地近くから「牛の時代」（4000～5500年前）のものが沢山見つかる。日の当たる所の壁画は残念ながら、かなり傷んでいる。日陰のものがやはり分かりやすい。中には、繊細に牛や人を描かれているもの、洗練された職人が描く芸術性に富むものも沢山ある。巨大な岩をキャンパスに数え切れないほどの牛、人、家が描かれ、当時の暮らしぶりや習慣が手に取るように分かる。次第に自分が、先史時代にタイムスリップし時間がゆったりと流れ先史の人々とコミニュケートしている。なんか先史の人々のほうが、あくせくしている現代人よりも豊かに大らかに生活している様に受け取れるが…どうだろうか。

そして、どれぐらい歩いたであろうか。タン・ズマイタクの大渓谷にやってくる。高さ数百メートルの垂直の断崖絶壁である。下を覗いて見る。狭く切り立っているの、途中までしか分からない。吸い込まれそう。その渓谷の近くに、「狩猟民の時代」（5500～7000年前）の円頭人物様式の壁画がある。有名な『癩痕のある人物』である。いまでも西～中央アフリカの黒人の間で、皮膚に傷をつけその癩痕を身体装飾にする慣習があるが、これはそれではないかと考えられている。岩陰にくっきり壁画が残っていて、幸運である。芸術的にもとっても素晴らしい。いまの北アフリカのマグリブ諸国にはネグロイドはほんの僅かだが、壁画にはアフリカのオリジンであるブラック・アフリカの特徴が存在している。今のサハラ南端のフラニ族によく似た共通の特徴があるという。以前ニジェール川を旅した時に会ったことがある。かつて彼らはサハラの地に住み狩猟や牛牧で生活していた。しかし、自然環境の変遷とともに南下し、サハラの主役を西方から入ってきた騎乗の牧人やラクダを使うトゥアレグ遊牧民に明け渡すこととなる。そして乾燥化がさらに進み、やがてサハラは無人の不毛の大地となり、深い沈黙だけが支配することとなる。1933年にタッシリの壁画がヨーロッパ人によって発見され、1956年にフランスの

博物学者アンリ・ロートにより調査、報告され、不毛の大地サハラのペールが剥がされ、かつて数千年にわたるサハラの歴史が人々の驚きとともに明らかにされて行く。大きい岩をキャンパスに色々な時代の壁画は「緑のサハラ」を証明するとともに、サハラを舞台とする民族の興亡の証でもある。

次のキャンプ地セファールにやってくる。セファールは、様々な風化侵食を受けた岩山が迷路のように入り組んだ山塊で、荒れ果てた大寺院の回廊を連想する。高い山塊に登って見渡すと、太古の水の浸食によってできた砂岩の林が、仏塔の如く整然と並ぶ。カンボジア・アンコールトムやミャンマー・パガン仏塔遺跡群…雄大で荘厳な広がり、そんなイメージを連想させる。

大迷路の中、大きい岩陰のキャンパスに非常に美しい3頭のレイヨウ（野羊）の壁画に出会う。全体にデフォルメされ印象に残る。そこから、少し歩いたところに今回一番の楽しみ、夢にまで見た『白い巨人』が出現する。それは3メートル位あろうか、両手を上げて構えている。独特のポーズである。そして長い間、白い巨人を眺めていると不思議な気持ちになる。どう表現したらいいであろう。奈良や京都の名仏を見ている様な…尊さ、ありがたみ…時間を超越して心に響い

てくる。白い巨人を眺めるとそういう時と同じ気持ちになる。白い巨人のその傍には、合掌し祈る数人の人物が見て取れる。イエスもアッラーも無き7000年の昔、白い巨人とはどういう存在だったのだろう。信仰の対象として崇められていたに違いない。畏敬の念のようなものが感じ取れる。

タッシリの人たちが、狩猟民の時代から数千年にわたり岩をキャンパスに延々と描いている。文字は、ラクダの時代のティファナ文字まで現れないが、牛牧民の時代の緻密な壁画により、当時の人々の暮らしが手に取るようにわかる。牛の存在とその管理によりコミュニティとなりムラが構成され、その中から長（ボス）が生まれ、やがて階級制度が出来、祭りそして政となる…芸術性高い壁画は、彼らの生活の中で非常に重要な位置を占めていることが分かる。エジプトのピラミッドができる5000年前に、アフリカの起源となるネグロイドの息吹が、いまは地球の極地、不毛の地のサハラで、確認されたのである。私は、彼らの壁画のみずみずしい生命力と創造力に脱帽し、且つ加速を増していく地球のオゾン層の破壊とそれによる温暖化と乾燥化、酸性雨等により、彼らの壁画もピラミッドもやがてサハラの砂と化して、彼らの存在も無くなってしまうのか憂えるのである。



●抄録● Back to the Origins of AFRICA 5000years before the Pyramids

タッシリ・ナジェール（アルジェリア）紀行

／筒井 淳

今は不毛の地であるサハラの奥地タッシリ・ナジェールにエジプトのピラミッドができる5000年前に アフリカの起源となるネグロイドの生活と緑と水に富んだサハラがあった。

タッシリ・ナジェールには、多くの岩壁画があり、それらは、その質の高さからサハラ美術とも呼ばれる。

Back to the Origins of Africa 5000years before the Pyramids

Jun TUTSUI D.D.S., D.D.Sc, F.I.C.D.

Tassili n`ajjer is the upper reaches of the Sahara.

Now there is barren land.

But 5000 years ago, before the pyramids in ancient Egyptian civilization, there is the life of Negroid originate in Africa. The Sahara was rich in green and water.

There are many Rock face paintings in Tassili n`ajjer. They are called Sahara art because they are of good quality

Key words : Tassili n`ajjer, Tuareg, The Round Head Period, The Pastoral Period